小児期腎疾患の早期発見に関する研究 ―まとめ―

岡田敏夫
富山医科薬科大学小児科

（序言）：本研究班は、60年度、61年度にひきつづき、小児期腎疾患の早期発見に関する研究として、下記事項につき検討した。

（検査方法、検査成績）：

1. 3歳児検尿成績について、本年度も各研究施設から報告が行われたが、各施設間での陽性率の差がきわめて大きく、その原因の1つとして、試験紙の規格、判読の差に大きな問題があるように思われた。また、従来の検査項目に加え、白血球、亜硝酸塩を検査する項目を加える必要性が報告された。
2. 小児期慢性腎不全にいたる疾患には、先天性腎尿路奇形がきわめて多く、これら疾患の早期診断のため、尿比重、尿中β_2－マイクログロブリンの測定が有用であり、さらに3次検診においては、腎の超音波検査が有用と思われた。
3. 正常新生児、乳幼児(生後4日～6歳)67例において、超音波検査を用いて、腎の前後径、縦径を計測し、正常児の腎成長が報告された。さらに、同検査にて、先天性・遺伝性腎尿路疾患の8症例が発見され、早期診断にきわめて有用である事が報告された。
4. 現在、最も診断が難かしい血尿症例の検査法として、尿中カルシウム／クレアチニン比の測定がなされている。今回、特発性高カルシウム尿症の診断基準の設定、ならびに、カルシウム結晶化の促進物質としてオステオカルシンが測定され、その意義について検討が加えられた。

   また、左腎静脈の圧迫が血尿の原因とされるいわゆるエントラプメント症候群について、超音波検査法を用いて確認する方法、さらに症例呈示がなされ報告された。
5. 今回アンケート調査により、小児期に発見された腎―尿路奇形225例が集計され、その結果、初診時発見動機、年齢、合併奇形、治療および予後、さらにβ_2－マイクログロブリン値について検討がなされた。出生前の胎児エコー検査、出生後なんらかの先天性奇形を有する児、腎の形態学的検査、尿中β_2－マイクログロブリンの測定が、腎奇形の早期発見に役立つものと思われた。また乳児期以降では、3歳児検尿、および学校検尿異常者に対しても、腎形態学的検索が必要と考えられた。
6. 小児期尿路感染症で、VURが発見されて逆流防止術を施行した16症例について、その後の経過を検討した結果、尿路感染症の頻度、身長の増加について改善傾向が認められたが、腎瘢痕や、レノグラムパターンの改善は認められなかった。今後VUR症例に対して、早期発見、早期治療、手術適応、手術時期について、十分なる検討が必要と思われた。

（結論）

以上、本研究班の成績について報告した。学校検尿の充実化に比較し、乳幼児期検尿法はいまだ確立されておらず、今後、乳児検尿、3歳児検尿の普及と、診断法の進歩により、乳幼児期腎疾患の早期発見、早期治療、ひいては腎不全えの進行阻止が可能となるのではないかと考えられる。いまだ、未解決の点が多く、今後さらに益々の研究の発展がのぞまれる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

小児期腎疾患の早期発見に関する研究
-まとめ-

岡田敏夫
富山医科薬科大学小児科

(序言):本研究班は、60年度、61年度にひきつづき、小児期腎疾患の早期発見に関する研究として、下記事項につき検討した。

(検査方法、検査成績):

1. 3歳児検尿成績について、本年度も各研究施設から報告が行われたが、各施設間での陽性率の差がきわめて大きく、その原因の1つとして、試験紙の規格、判読の差に大きな問題があるように思われた。また、従来の検査項目に加え、白血球、亜硝酸塩を検査する項目を加える必要性が報告された。

2. 小児期慢性腎不全にいたる疾患には、先天性腎尿路奇形がきわめて多く、これら疾患の早期診断のため、尿比重、尿中β2 一マイクログロブリンの測定が有用であり、さらに 3次検診においては、腎の超音波検査が有用と思われた。

3. 正常新生児、乳幼児(生後4日～6歳)67例において、超音波検査を用いて、腎の前後径、縦径を計測し、正常児の腎成長が報告された。さらに、同検査にて、先天性・遺伝性腎尿路疾患の8症例が発見され、早期診断にきわめて有用である事が報告された。

4.現在、最も診断が難かしい血尿症例の検査法として、尿中カルシウム/クレアチニン比の測定がなされている。今回、特発性高カルシウム尿症の診断基準の設定、ならびに、カルシウム結晶化の促進物質としてオステオカルシンが測定され、その意義について検討が加えられた。

また、左腎静脈の圧迫が血尿の原因とされるいわゆるエントラプメント症候群について、超音波検査法を用いて確認する方法、さらに症例呈示がなされ報告された。

5. 今回アンケート調査により、小児期に発見された腎一尿路奇形225例が集計され、その結果、初診時発見動機、年齢、合併奇形、治療および予後、さらにβ2 一マイクログロブリン値について検討がなされた。出生前の胎児エコー検査、出生後なんらかの先天性奇形を有する児、腎の形態学的検査、尿中β2 一マイクログ□ブリンの測定が、腎奇形の早期発見に役立うものと思われた。また乳児期以降では、3 歳児検尿、および学校検尿異常者に対しても、腎形態学的検索が必要と考えられた。

6. 小児期尿路感染症で、VUR が発見されて逆流防止術を施行した16症例について、その後の経過を検討した結果、尿路感染症の頻度、身長の増加について改善傾向が認められたが、腎瘢痕や、レノグラムパターンの改善は認められなかった。今後VUR症例に対して、

早期発見、早期治療、手術適応、手術時期について、十分なる検討が必要と思われた。

(結論)

以上、本研究班の成績について報告した。学校検尿の充実化に比較し、乳幼児期樹表法はいまだ確立されておらず、今後、乳児検尿、3 歳児検尿の普及と、診断法の進歩により、乳幼児期腎疾患の早期発見・早期治療、ひいては腎不全えの進行阻止が可能となるのではないかと考えられる。いまだ、未解決の点が多く、今後さらに益々の研究の発展がのぞまれる。